

中国雲南省の世界遺産都市・麗江旧市街地における町並みの変容に関する研究

北山めぐみ*・藤木庸介**・山村高淑***・張 天新****

Research on The Transformation of The Townscape on The World Heritage Site ”The Old Town of Lijiang” in Yunnan, China

Megumi KITAYAMA, Yosuke FUJIKI, Takayoshi YAMAMURA, Tianxin ZHANG

Summary

This paper reports on the transformation of the historic townscape of The Old Town of Lijiang, a World Heritage site located in Yunnan Province, China. We clarified the changes in the townscape for about 10 years in 2005, 2007, and 2017 obtained from the field survey. From the results, we considered the transformation process of the historic townscape where tourist destinations progress.

Keywords: Lijiang, World Cultural Heritage, Historic townscape, facade, Town tourism

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

中国雲南省の北西部に位置する麗江旧市街地（図1・2）は、南宋（1127～1279）末頃に都城建設が始まったとされる歴史都市である。秦代より「南方シルクロード」や、「茶馬古道」の交易の要衝として栄え、また主な居住民族である納西（ナシ）族が独自の文化を発展させてきた。こうした背景から形成された町並みや生活文化が評価され、1997年に世界文化遺産に登録された。しかし登録以降、観光客が急増し、観光客向け店舗の増加とそれに伴う増改築や、外部からの人口流入・地域住民の流出など、空間的・社会的なインパクトがもたらされ、歴史的な町並みや地域住民の生活をいかに保全していくかが課題となっている。



図1 麗江旧市街地の位置



図2 麗江旧市街地図

* 高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 准教授
** 滋賀県立大学 人間文化学部 教授
*** 北海道大学 観光学高等研究センター 教授
**** 北京大学建築景観設計院 副教授

こうした状況を踏まえ、筆者らは2003年から2007年にかけて、当該地域における空間的・社会的変容の実態を捉え、自律的な観光開発のあり方について考察を行ってきた¹⁾。本稿で扱う歴史的町並みの様相については、2005年から2007年にかけて建築ファサードの撮影による定点観察を行ってきた。その結果、調査対象エリア内の建築物のおよそ2割において、店舗の入れ替わりや業種の変更が要因となり、看板や庇等の付属物や開口部周りの変化が生じていること、流入人口による経営によって新たな意匠の要素が持ち込まれていること、またその変化にはエリアの集中が見られることなどが明らかとなった²⁾。

本研究では、前調査から約10年が経過する2017年9月に現地にて同様の調査を行い、町並みが変わったような変容を見せているのかを明らかにするとともに、2005-2007年時に見られた変化の傾向と比較することで、観光地化が進む歴史的町並みにおける変化のプロセスについて考察する。本研究成果は、当該地域のみならず、歴史的町並み保全に取り組む各地における長期的な町並み保全に向けた知見になり得るものと考えられる。

1.2. 研究の方法と調査対象の概要

本稿では、2005年8月、2007年8月、2017年9月に現地にて採取した建築の外観構成要素と建築用途のデータを用い、次の手順にて分析を行う。①建築の使われ方が町並みの変容に影響することから、建築用途の推移とエリア的傾向を整理する(2章)。②建築ファサードにどのような変容が見られるかを把握するため、構成要素ごとに分析する(3章)。③建築物及び町並み全体としての意匠の特徴とその変容について検討するため、クラスター分析を用いて類型化を行う(4章)。①～③の結果を関連させ、観光地化のプロセスと町並みへの表出について考察を行う。

・町並みの構成

麗江旧市街地は北部から流れる山の伏流水が地区の北端で3本に分流し、これを囲むように歪な台形形状をなす(図2)。麗江旧市街地の中心部には四方街と呼ばれる広場があり、かつては市が開かれる場として利用され、現在も観光客が集まるエリアの中心となっている。このことから、四方街から伸びる主要な街路には、写真1に示すような街路に向けて木戸を設けた店舗建築が軒を連ねる(以下、この構成の建築ファサードを開放型と呼ぶ・図3左)。一方、それらの街路から分岐する路地や四方街から距離をとった街路には、写真2に示すような街路面を壁面と入口で構成する住居建築(以下、この構成の建築ファサードを閉鎖型と呼ぶ・図3右)が見られる。当該地区の町並みの構成は、交易を主体とした交易主要エリア(写真1)と、住民が暮らす生活主要エリア(写真2)の2つの側面を持つ。また、交易主要エリアに立ち並ぶ店舗の多くは、現在は土産物店となっていることから、現在の観光主要エリアと捉えることができる。



写真1 開放型で構成される交易主要エリア



写真2 閉鎖型で構成される生活主要エリア

・ 建築の構成

本稿は建築ファサードに着目するものであるが、建物内部の利用にも関連することから、基本的な建築構成について概観しておく。当該地区の建物は、木造の軸組に、壁面を日干し煉瓦もしくは焼成煉瓦で構築する。切妻・瓦葺きとし、基本的に妻側は壁面で構成し、平側に開口部を設ける。平面構成は、図4に示すように中国で多く見られる中庭型住居である。四合五天井・三坊一照壁が典型的な配置であるが、旧市街地内は水路に沿って歪な街区が構成されることから、一坊や二坊あるいは中庭を持たないタイプも見られる。また、1つの棟は幅3m程の室を3つ並べた3間間口を基本とするが、交易主要エリアでは店舗を密集させるため3間未満あるいは3間以上で構成するものも多い。なお、交易主要エリアの場合、街路に面した棟は店舗とするが、内部は居住スペースとして用いられる。

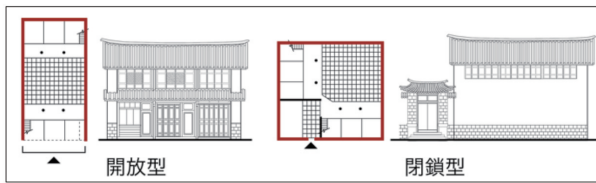


図3 麗江旧市街地の建築類型（平面・立面）

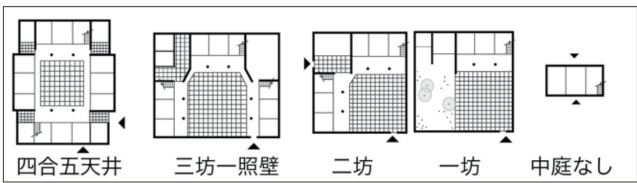


図4 平面構成の基本的な類型

・ 町並みの保護制度

麗江旧市街地の町並み保護施策は、中国の歴史文化遺産保護制度の一つである「歴史文化名城保護制度」により1986年に開始され、基本的な保護の方針や理念が定められた。1997年に世界文化遺産への申請に向けた保護計画が策定され、登録に至ったが、その後、急速な観光地化が進んだため、2004年に新たに条例を策定し、2006年には建築物の修理・改築時の具体的なガイドラインとして建築意匠の正誤事例を示した「麗江古城伝統民居保護維修手冊」を発行した。さらに、2013年には商業従事者向けの店舗意匠やゾーン形成に言及した「世界文化遺産麗江古城伝統商業文化保護事項規則指導手冊」を発行している。本稿は、これらの行政施策を参照しながらも、町並みで生じる事象を観察し、変容の動向や背景について考察しようとするものである。

・ 調査対象

調査対象は2005年時に設定した範囲であり、観光客の往来が多く観光地化の影響を受けやすいと想定される交易主要エリアとした。四方街から伸びる①七一街、②現文巷、③黄山上段・黄山下段、④翠文段・双石段の4つの街路である（図5）。街路ごとの建築物数を表1に示す。なお、建物総数が約10年間で14件（4%）減少しているが、これは隣接建物との合築によるものである。



図5 調査対象街路

表1 調査対象建築物数

調査年次	2005年	2007年	2017年
①七一街	145	144	143
②現文巷	41	41	39
③黄山上段・黄山下段	81	81	77
④翠文段・双石段	148	147	142
合計	415	413	401

2. 建築用途の推移とエリア的傾向

2.1. 建築用途とその変化

建築の用途別推移を整理したものを図6に示す。2005年時点は物販利用が全体の約半数を占めており、次いで非商業すなわち住居利用が最も多く見られた。2007年には物販・飲食・宿泊利用がともに微増し、非商業利用の減少が見られる。2007年から2017年では物販・宿泊にはほぼ変化がなく、飲食利用の増加が顕著である。このことから、調査期間を通して商業ニーズが変化してきたと考えられる。また、こうした商業店舗の増加は、2007年・2017年も変わらず非商業建物の商業化によって生じており、商業エリアとしての性格を強めていることがわかる。

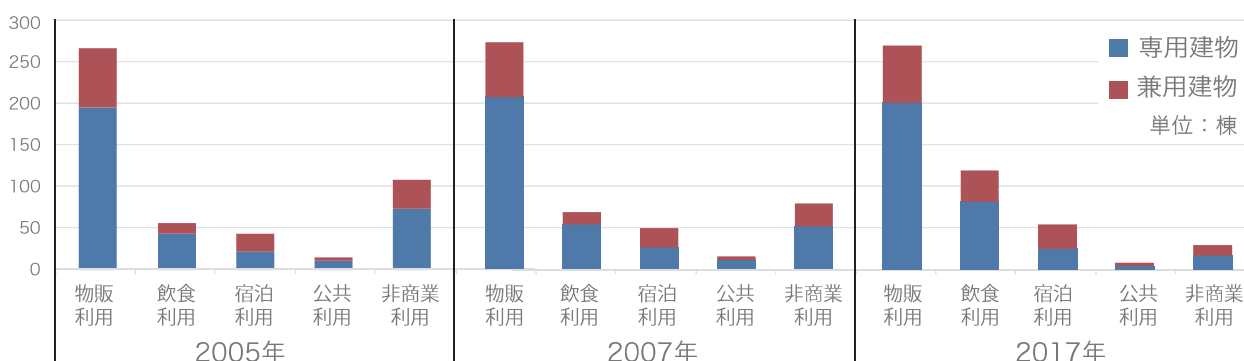


図6 建築の用途別推移（1つの用途を1とカウント、複数用途の場合は複数カウントとなる）

2.2. 店舗の数と規模

当該地区の店舗は、1.2の建築の構成で述べたように、1間が基本的な規模であり、1棟に複数店舗が入るのが伝統的な形式である。この点を踏まえて店舗の数と規模を整理する（表2）。店舗総数は2005年には603件であり、2007年は631件、2017年は665件と増加しているが、期間から見ると2007年までの方が増加率は高いと言えよう。店舗規模は、1間間口が8割を占め、2割を2-3間の小規模店舗で構成していたが、2007年、2017年には4-6間、7-11間の大規模店舗が増加傾向にある。

表2 調査対象街路

	2005年	2007年	2017年
1間間口	484 (80%)	504 (80%)	517 (78%)
2-3間	111 (19%)	113 (18%)	106 (16%)
4-6間	7 (1%)	12 (2%)	24 (3%)
7-11間	1 (0%)	2 (0.3%)	18 (3%)
店舗総数	603 (100%)	631 (100%)	665 (100%)

2.3. エリア別にみる建築用途とその推移

建物ごとに用途をプロットしたものを図7に示す。2005年時は、物販はいずれの通りにも見られるのに対し、飲食は翠文段・双石段に集中し、非商業は黄山上段・黄山下段の奥に集中する傾向が見られる。2017年には、翠文段・双石段に混在していた非商業の建物が飲食利用へ移行し商業地としての密度が高まっていることに加え、飲食が七一街にも見られるようになる。また、黄山上段・黄山下段が宿泊を主としたエリアへと移行している。2005年時に見られたエリアの性格は大きくは変わらないものの、エリア特性を強めると共に、新たなエリア形成が見られる。

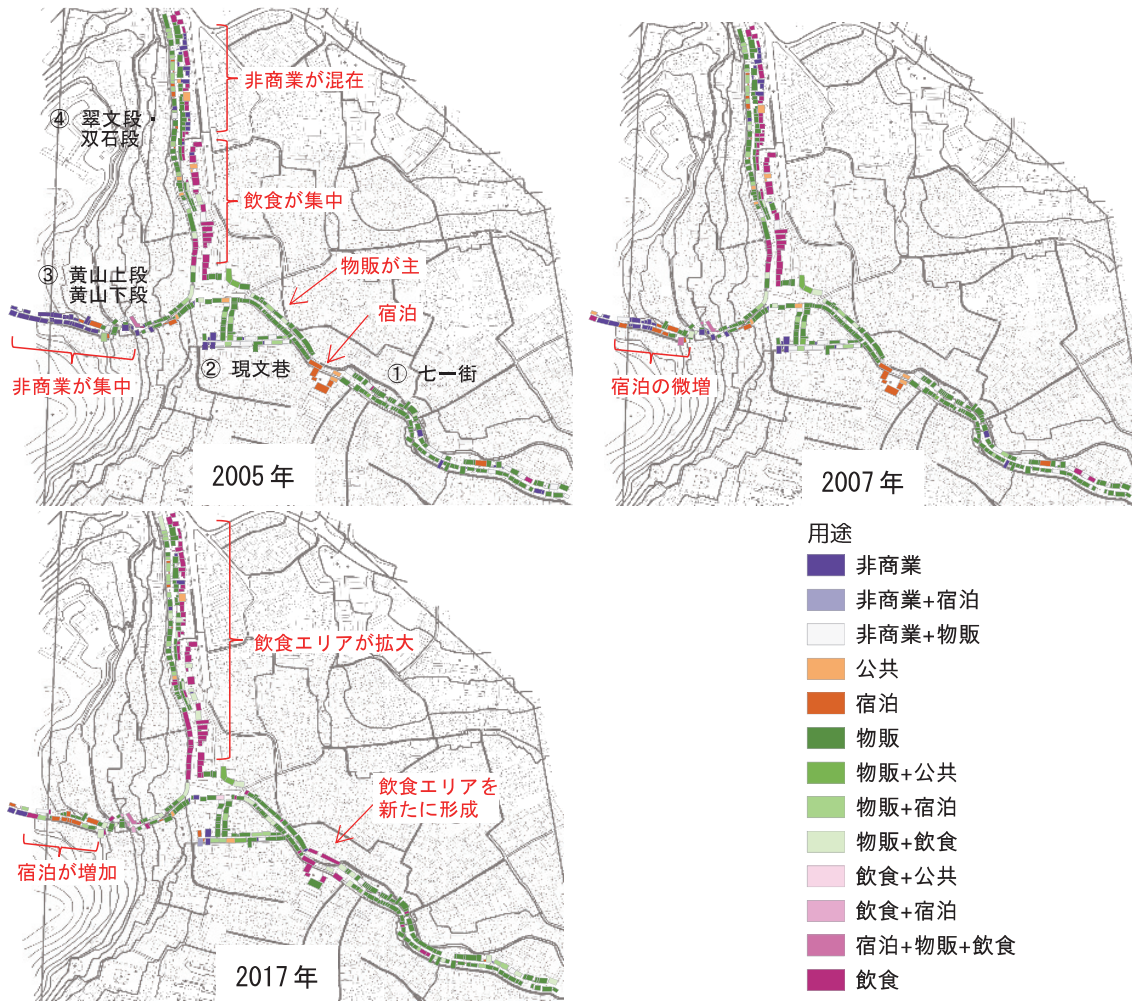


図7 建築の用途別分布

3. 町並み構成とその変化

3.1. 町並み構成の分析方法

町並みの変化は、変化する建築物の部位によって町並みへの影響が異なることから、牛谷ら³⁾の手法をベースとし、図8に示す4つの指標を用いる。①間口、階高による表構えの規模を示す「フレーム」、②屋根や下屋などの断面形状を示す「シルエット」、③壁面や開口部などから構成される面構成を示す「パート」、④開口形式などの構成を示す「マテリアル」の4つである。

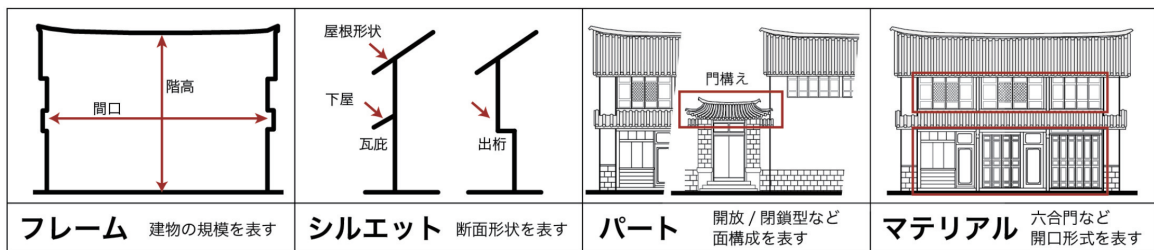


図8 町並み構成を把握する4つの指標

3.2. フレーム

間口の構成を表3に示す。2-3間幅が最も多く、次いで1間以下、4-5間幅が見られるが、

1 間以下が微減、5 間以下のものが微増しており、その傾向が2007年、2017年ともに見られる。階高の構成を表4に示す。2階建が最も多く、次いで平屋が多く見られ、2007年には殆ど変化は見られなかったが、2017年には平屋が6%減少、2・3階建が増加している。なお、2.2.で店舗の大規模化が生じていると述べたが、間口レベルではそれほど大規模化していない。これは表5に示すように、複数の建物の内部壁を抜いて内側で繋ぎ、1つの店舗として利用するケースが増加しているためである。

フレームレベルでは、小規模な建物を3-5間間口、2-3階建と規模を大きくする傾向が見られる。加えて、フレームを変化させない大規模利用も生じており、麗江が従来持っている建物規模を超えた商業ニーズが強まっている。

表3 間口幅

	2005年	2007年	2017年
1 間以下	116 (28%)	112 (27%)	94 (23%)
3 間以下	239 (58%)	239 (58%)	240 (60%)
5 間以下	54 (13%)	56 (14%)	61 (15%)
6 間以上	6 (1%)	6 (1%)	6 (1%)
合計	415 (100%)	413 (100%)	401 (100%)

表4 階高

	2005年	2007年	2017年
平屋	139 (33%)	131 (32%)	103 (26%)
1階+屋上	6 (1%)	10 (2%)	8 (2%)
2階建て	253 (61%)	254 (61%)	269 (67%)
2階+屋上	4 (1%)	4 (1%)	3 (1%)
3階建て	13 (3%)	14 (3%)	18 (4%)
合計	415 (100%)	413 (100%)	401 (100%)

表5 店舗利用と建物との関係

	2005年	2007年	2017年
独立利用による商業利用建物	295 (89%)	286 (81%)	289 (75%)
横断利用が見られる商業利用建物	36 (11%)	67 (19%)	96 (25%)

3.3. シルエット

屋根形状は表6に示すように、2017年に切妻平入が減少、妻入が微増する傾向が見られる。また、陸屋根は継続的に減少しており、事業者にとっても相応しくないと捉えられていると考えられる。下屋の構成を表7に示す。瓦庇が増加しているが、これは2階建の増加によるものである。2005年には見られなかった門構えの増加が顕著であるが、これは図8に示す住居入口に設けるのが一般的な庇を開放型に取り付けたものである。飲食店や大型店舗の出現に伴い、入口部分を明確にするために生まれた新たな形態と言える。

表6 屋根形状

	2005年	2007年	2017年
切妻平入	363 (87%)	364 (88%)	347 (87%)
切妻妻入	45 (11%)	43 (10%)	50 (12%)
陸屋根	7 (2%)	6 (2%)	4 (1%)
合計	415 (100%)	413 (100%)	401 (100%)

表7 下屋の形状

	2005年	2007年	2017年
瓦庇	188 (68%)	198 (70%)	208 (70%)
出桁	39 (14%)	37 (13%)	34 (8%)
門構えを有するもの	0 (0%)	3 (1%)	20 (7%)
RC庇	19 (7%)	20 (7%)	13 (4%)
なし	32 (12%)	25 (9%)	21 (7%)
合計	278 (100%)	283 (100%)	296 (100%)

3.4. パート

パートは表8に示すように、商業利用を基本とする開放型が増加し、居住利用に用いられる閉鎖型や門が減少、塀に至っては消滅している。職住混在の町並みから商業専用とする性格を強めていると言える。

表8 建物形式

	2005年	2007年	2017年
開放型	330 (80%)	346 (84%)	365 (91%)
閉鎖型	52 (13%)	40 (9%)	20 (5%)
門(塀を持つものを含む)	30 (7%)	24 (6%)	16 (4%)
塀	3 (1%)	3 (1%)	0 (0%)
合計	415 (100%)	413 (100%)	401 (100%)

3.5. マテリアル

1階開口形式の構成と推移を表9に示す。全面開放ができる六合門（図9）と伝統的な形式によらないその他開口が増加傾向にあり、腰壁を介して商いを行う形式は減少傾向にある。

2階開口形式について表10に示す。伝統的な形式には図9右に示す3種類があるが、三挟式、連挟式が減少し、開口面積の多い連戸式が増加している。加えて、上記の形式によらないその他の開口が最も増加している。開口形式の変化は、伝統的な形式の中で利便性の高いものが選択される傾向と、伝統的な形式によらないものへの変化の2つの方向性が見られる。

表9 1階開口形式

	2005年	2007年	2017年
六合門	202 (49%)	224 (54%)	258 (64%)
腰壁式	31 (7%)	41 (10%)	19 (5%)
開き戸	41 (10%)	36 (9%)	29 (1%)
六合・腰壁・開きの複合	74 (18%)	61 (15%)	34 (8%)
その他開口	31 (7%)	22 (5%)	29 (7%)
その他開口を含む複合	13 (3%)	9 (2%)	26 (6%)
壁面	23 (6%)	20 (1%)	6 (1%)
合計	415 (100%)	413 (100%)	401 (100%)

表10 2階開口形式

	2005年	2007年	2017年
三挟式	48 (18%)	46 (17%)	28 (10%)
連挟式	56 (21%)	51 (18%)	37 (9%)
連戸式	85 (31%)	75 (27%)	89 (30%)
欄干	29 (11%)	48 (17%)	32 (11%)
その他窓	37 (14%)	36 (13%)	101 (35%)
壁面	11 (4%)	10 (4%)	3 (1%)
テラス	5 (2%)	10 (4%)	2 (1%)
合計	271 (100%)	276 (100%)	292 (100%)

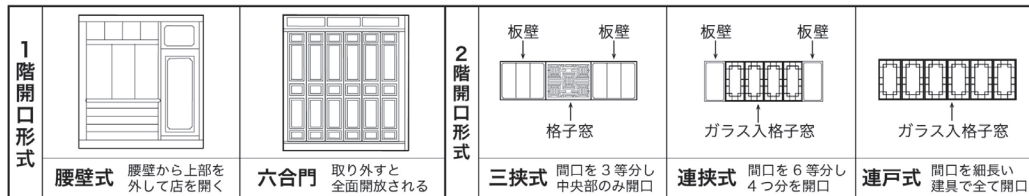


図9 伝統的な開口形式

4. 建築ファサードの類型化による町並みの変容

本章では、建築物としての意匠的傾向と、それらが連担した町並みとしての表出の傾向を見るため、2005年、2007年、2017年の計1227サンプルを対象に外観の類型化を行う。

4.1. 建築ファサードの類型化

分析対象は、3章にて扱った項目〈間口・階数・屋根形状・下屋・建物タイプ・1階開口部・2階開口部〉の7アイテム36カテゴリーの定性データである。ここではサンプル数が大量であることから平屋（1階+R Fを含む397サンプル）と2階以上（2階～3階の830アイテム）に分けて類型化を行なうこととする。まず、アイテム同士の相関が高い項目を除外し、6アイテム32カテゴリーを対象に数量化Ⅲ類を適用した。2軸までの各サンプル固有値を用いてユークリッド平方距離・ウォード法によるクラスター分析を行い、クラスター同士の結合距離が比較的長くなる箇所（図10、11の一点鎖線）で6つずつ、合計12のクラスターを得た。クラスター別にアイテム中30%以上の特性項目を記述要素として各クラスターを分類した（表11）。各外観タイプの特徴を表12にまとめた。

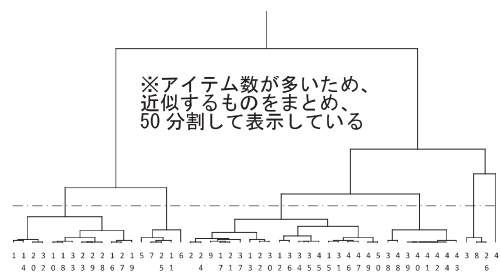


図10 平屋建築物デンドログラム

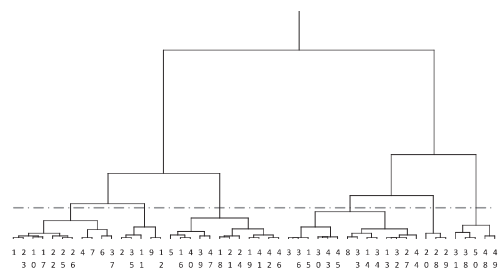


図11 2階以上建築物デンドログラム

表11 タイプ別外観構成要素 (30%以上の特性項目に着色)

アイテム	カテゴリー	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る	を
		1F小規模店舗型	1F中規模店舗型	2F大規模店舗型	小規模2F開放型	中規模2F採光型	1F中規模平妻店舗型	1F中規模現代店舗型	2F中規模妻入現代店舗型	1F屋上テラス型	2F陸屋根屋上型	1F門型	2F妻入住居型
間口	1間以下	80	1		105			19	30	2	11	73	
	3間以下	12	86	170	81	141	54	24	120	7	4		18
	5間以下		27	121	7	7	6	2	1				
	6間以上		3	13		1		1					
階数	1階	92	117				60	31				73	
	1階+RF							15		9			
	2階			294	179	139			140		4		18
	2階+RF										11		
屋根形状	妻入		1			2	19	1	99				15
	平入	92	116	304	193	147	41	41	52	9	2	73	3
	陸屋根							4			13		
下屋	RC庇				42				3		7		
	なし							6	55	2	2		12
	瓦庇			224	110	142	8	6	85	6	5		6
	出桁			80	29	1							
1F開口	門構有				9	5			7	1	1		
	六合門	78	107	213	115	90	11	9	50	1	7		
	腰壁式		1	10	34	12	1	18	10	5			
	開き戸	12			12				9			73	
	六・腰・開複合			69	22	27	36	1	7	1	6		
	その他開口					9	2	14	56	2			
2階開口	その他複合			12	10	11	8	1	6				
	壁面	2	9				2	3	13		2		18
	三挟式			107	10	2			3				
	連挟式			106	29	2			5		3		
	連戸式			61	40	89			55		4		
	その他窓			26	27	56			63				2
	壁面							1	5		2		16
	欄干			2	84			2	15		6		
テラス				3				5	9				
不明			2										
各クラスターのサンプル数		92	117	304	193	149	60	46	151	9	15	73	18

表12 外観タイプの特徴

記号	タイプ名称	サンプル数	説明
い	1F小規模店舗型	92	1間以下の小規模間口で平入の平屋、六合門で構成した型。
ろ	1F中規模店舗型	117	2-3間の中規模間口の平屋、開口部を六合門とする型。
は	2F大規模店舗型	304	2-5間の大規模間口で1階を六合門、2階を三挟式もしくは連挟式とし、2階の採光を抑えた伝統的な型。
に	小規模2F開放型	193	1-3間の小規模間口で1階を六合門、2Fを欄干で開放した型。
ほ	中規模2F利用型	149	2-3間の中規模間口で1階を六合門、2階を連戸式もしくはその他窓とし、積極的に2階の採光を得ようとする型。
へ	1F中規模平妻店舗型	60	2-3間の中規模間口で平入と妻入を含む。六合門・腰壁・開き戸の伝統的な形式の建具が複合的に用いられる型。
と	1F中規模現代店舗型	46	1-3間以下の間口で平屋建てに屋上を持つものを含む。 腰壁もしくは伝統的な形式によらない開口形式をとる現代的な型。
ち	2F中規模妻入現代店舗型	151	2-3間の中規模間口で妻入とするものが多く、1・2階とも伝統的な形式によらない開口形式を取る現代的な型。
り	1F屋上テラス型	9	2-3間の中規模間口で平屋建ての屋上にテラスを持つ型。
ぬ	2F陸屋根屋上型	15	1間以下の小規模間口で陸屋根とし2階建の屋上を持つ現代的な建築物の型。 1階は六合門、2階は欄干で構成する。
る	1F門型	73	1間以下の小規模間口で、開き戸で構成する門の型。
を	2F妻入住居型	18	中規模間口の妻入、1・2階とも壁面で構成する住居の型

4.2. 建築用途との関連性

各外観タイプに属する建築物の用途を集計したものを図12に示す。物販利用が多くみられるタイプは「い」から「へ」及び「ぬ」の7タイプであり、1階開口部を六合門で構成する店舗建築である。飲食利用が最も多くみられるタイプは「り」の屋上テラス型で、飲食スペースとして屋上を設けている。「に・ほ・と」にも飲食利用が一定数見られるが、屋上や2階、1階も含めて伝統的な形

式によらない開口形式を用いている。宿泊利用は「る」の門型に最も多く見られる。開き戸は居住部分への入口であり、非商業建物を宿泊利用に転用したものである。

以上から、物販利用及び宿泊利用では伝統的な構成を保持しているのに対し、飲食では伝統的な形式によらない意匠を採用する傾向にあると言える。飲食の場合、飲食スペースを確保するために内部利用が促されるとともに、観光客へのアピールが必要となることなどがファサード変化を誘発していると考えられる。

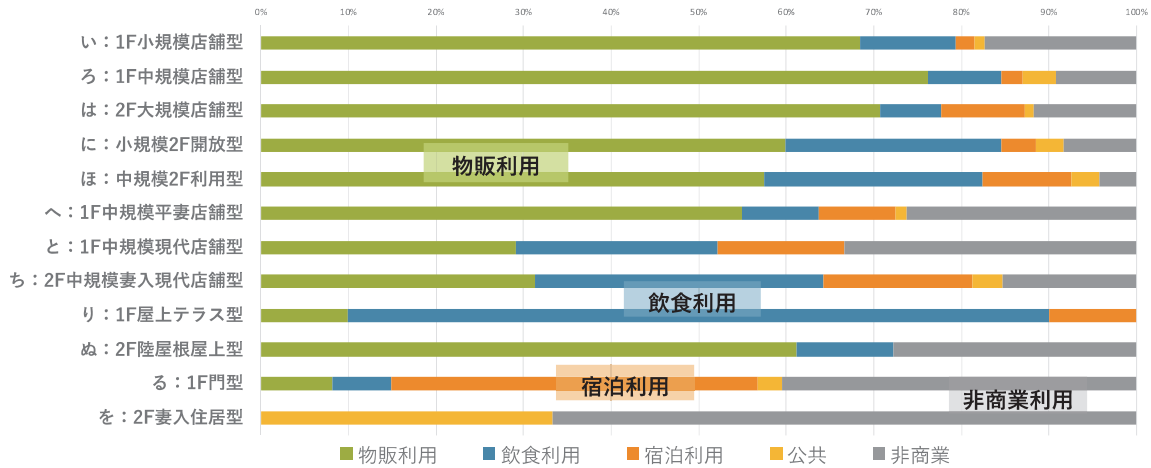


図12 外観タイプ別の建築用途の内訳 (1件で複数用途を持つ場合は複数カウント)

4.3. 調査年度毎の推移

調査年度毎の外観タイプ別件数を図13に示す。2007年と2017年では、増加する外観タイプが異なる傾向が見られる。「に・り」は建具を外して屋上や2階を開放したもので、2017年には減少に転じている。一方、2017年に増加の見られる「ほ・ち」も伝統的でない開口形式を採用したものである。このことから、観光利用が進み、多様な使われ方がされる中でも、一定の規範を保持しながら、その範囲内で独自性を出そうとしていると考えることができる。

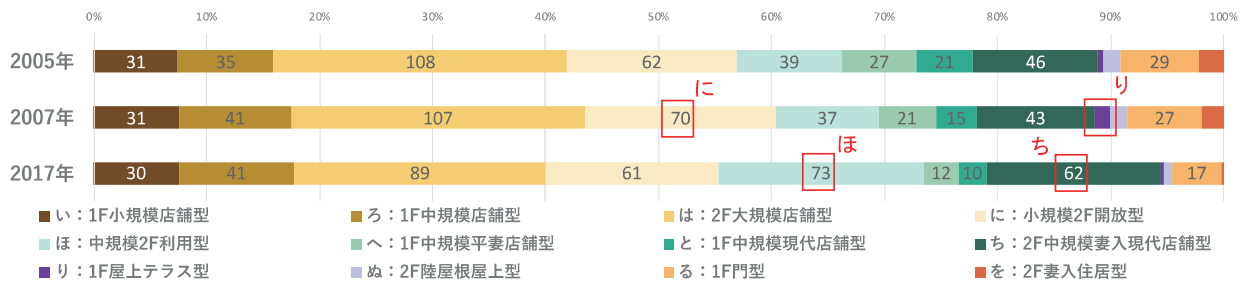


図13 外観タイプ別件数の調査年ごとの推移

4.4. 街路上の分布とその推移

建物ごとに外観タイプ別に塗り分けたものを図14に示す。2005年時の分布を見ると、4つの街路のうち現文巷は同一タイプが集中しているのに対し、その他の街路は各タイプが混在している。街路ごとのタイプ構成は2007、2017年も大きくは変わっていないが、飲食利用が集中する翠文段・双石段、及び新たに飲食利用が見られるエリアではタイプの変化が集中していることがわかる。

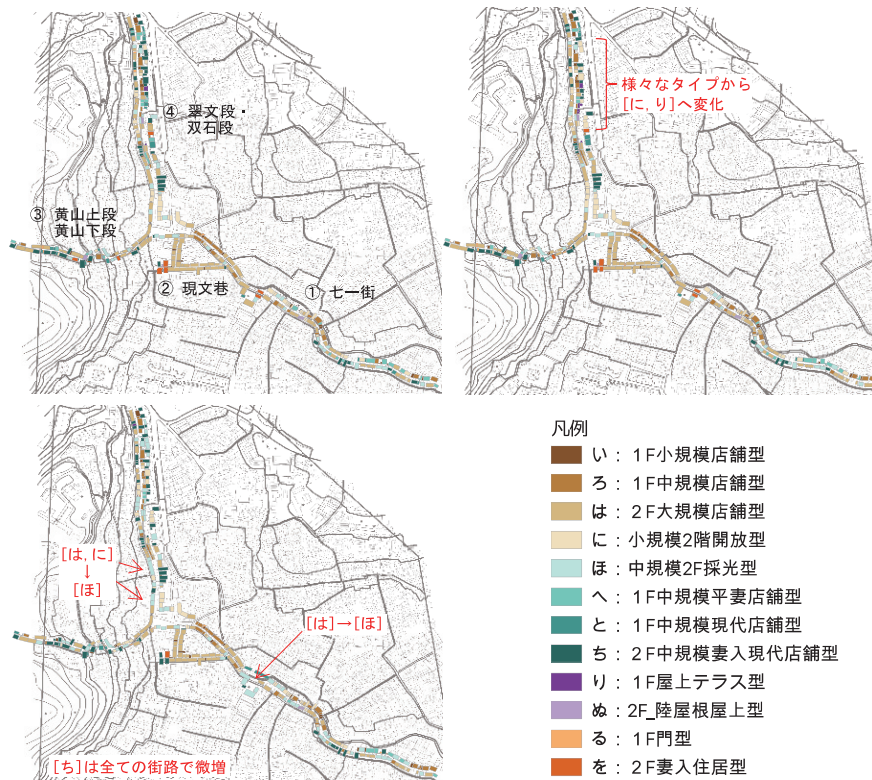


図14 外観タイプ別の分布

5. まとめ

本研究では、世界遺産登録に伴い観光地化が進行する麗江旧市街地において、2005-2017年における町並みの様相に着目し、商業地としての性格を強める変容と、そのプロセスとして次の点を明らかにした。調査期間を通して店舗数の増加と業種の変化がみられ、2007年時には、観光客向けの物販に適した六合門の増加、閉鎖型から開放型への変化といった傾向が看取された。2017年時にはサービスの多様化が進行し、従来の建築ボリュームを超えた大型店舗が出現し、2階利用の促進や、伝統的に見られない意匠の顕著な増加が確認された。当該地域は、交易で行き交う人々へ商いを行ってきた街であり、その対象が観光客へと変化し、従来の町並みの構成を生かして対応してきたが、観光地としての成熟度が増す中で、その構成を超えた利用が行われるようになった。本研究では、建築ファサードを長期にわたり定点的に見ることで、変化の捉え方の一端を明らかにした。本研究は一事例に過ぎないが、こうした変化の起こりうる地域において、定期的に町並みを観察し共有することは、町の将来像を考える有用な手段の一つとなり得ると期待できる。

参考文献

- 1) 山村高淑、張天新、藤木庸介編：世界遺産と地域振興、世界思想社、2007
- 2) 藤木庸介、北山めぐみ、山村高淑：世界遺産都市における町並みの変容に関する社会的要因の考察～観光地化が世界遺産都市・麗江に与える空間的・社会的インパクトに関する研究その17～日本建築学会学術講演梗概集（中国）、2008.9
- 3) 牛谷直子、増井正哉、上野邦一：歴史的町並みにおける景観形成の規範の抽出に関する事例的研究、第36回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.775-780.2001